

春日大社 銅製釣燈籠の修復



形はもとより、古色に復元

歴史的な美術工芸品でもある釣燈籠 匠の技を現代に蘇らせる修復に挑む

春日山原始林を背景にした約三十万坪の境内をはじめ、数々の重要文化財を有する西暦768年創建の春日大社は“古都奈良の文化財”として世界遺産に登録されている。そんな春日大社のもうひとつの見所が『釣燈籠』だ。材質は銅製が多く、古くは鎌倉、室町時代の物もあり、総数は約千基。社殿や廻廊に幾重にも懸け並べられた姿は壮観である。年代物は緑青、近年の物は黄金色に光り輝く。各作品には、時代を代表する匠の手により様々な文様や家紋が彫り、透かし、レリーフなどで施されている。側壁に当たる火袋には寄進者名、制作された年月日、制作者の名が記され、寄進者には、徳川綱吉、直江兼統、藤堂高虎など、歴史を彩る錚々たる偉人の名もある。

春日大社宝物殿
主任学芸員
松村 和歌子氏

ところがこの釣燈籠、他の古神宝とは違い日頃から釣下げられ使用されているため、落下などにより、損傷してしまった物も多い。歴史的な美術工芸品でもある釣燈籠の修復は、誰の手で行われているのだろうか。

「釣燈籠は、神社仏閣を支える奈良や京都の飾り師と呼ばれる職人が制作しています。奈良は社寺の都であり、京都に次ぎ工芸の栄えた町で、特に銅の工芸に秀でていました。春日大社にある銅の細工は、奈良の伝統工芸から来ているんですよ」と話すのは、宝物殿主任学芸員の松村和歌子氏。「修復作業は、昭和三十年代くらいまで地元の飾り職人がボランティアで行っていました。しかし、次第に職人の数も減り、現在は地元の企業にご協力いただいています」。だが、それも簡単な修理のみ。複雑な修復となると、匠の技を再現する特別な技術が必要とされる。そこで白羽の矢が立ったのが、東京藝術大学美術学部の鍛金研究室だ。

分解して構造や組立て方を研究 損失部分は、残った形から想像を巡らせる

「一昨年、受託研究として十基の釣燈籠の修復依頼がありました。届いた釣燈籠には落下などによる破損、歪み、へこみ、また

金属疲労による損傷などが見受けられましたが、構造がわからないと手の打ちようがない。まずは分解し調べることにしました」と東京藝術大学の篠原行雄教授。すると制作された時代で、構造や組立て方が微妙に違うことがわかってきた。「文字や文様の透かしや彫りなど表面に施された細工は実に繊細です。ところが中を開けて内側を見ると割とおおざっぱ。当時の職人のおおらかさが見て取れて面白かったですよ」。外見だけではわからない多くのことを学べたと話す篠原教授。修復の際は、今後の落下防止のため、構造的な弱点となる部分の補強を宝珠と基台の内部に加えることも忘れなかった。

東京藝術大学
美術学部 鍛金研究室
教授 篠原 行雄氏

この修復作業が評価され、昨年新たに銅製三基、鉄製一基が持ち込まれた。「今回の依頼品には、壊れてなくなった部分もあります。失われた箇所をどう復元するかいろいろと悩みました」。

修復前の釣燈籠を見せていただく。寄進者は、豊臣政権下の五大老の一人である宇喜多秀家。全体にたわみ、笠、火袋の扉の一部、基台の一部と脚の部分までも欠損してしまっている。「例えばレリーフは、残っている部分と対になっているかを調べたり、同時代の物を参考にしてどんな形だったのかを想像していきました。現在、作業は5人で行っています。我々だけでは判断できないことも多く、東京藝術大学 大学美術館の原田一敏教授と春日大社の松村氏と相談しながら作業を進めています」。

春日大社の松村氏は「風が吹くと音が出る鳴蝉型という鉄製の釣燈籠の修復もお願いしています。音の出る部分には、和楽器の笙に使う銅製のリードを応用する案も出ているようです。はたしてどんな声で鳴いてくれるのか、楽しみにしています」。

一つひとつを
どう修復するか、入念に相談双方の知恵と技術で
失われた形が蘇っていく